

建国70周年と開拓者たち

今回幕屋の友人であるエヤルさんのぶどう園で働く機会を与えられた。

なんと「じいば、荒野のと真ん中にあるカルメイ・アフダットというぶどう園だった。エヤルさんに色々な質問をして開拓者の姿に迫っていきたいと思う。」



左：エヤルさん 右：筆者

——なぜ荒野を開拓しようと考えられたんですか？

はじめて夫婦で荒野に来たときのインパクトは強烈だった。そこは何もない空間だったが、大きな可能性を感じたんだ。

それ以来、荒野が頭から離れなかった。二人とも普通の仕事をしてきたが、なぜか心が満たされない状況が続いていた。その時に突然、荒野でゼロから何か新しいものを作りたいというビジョンが湧いてきた。それがこの荒野に農園を建て、ワインを作ることだったんだ。

——素敵なお話ですね！しかし荒野の開拓は大変だったのでは？

最初は、水・電気という生活に必要な物もなければ、ぶどうを育てる知識さえもなかったんだ。私たち



開拓当初のぶどう園（1998）

は、すべて自分たちで切り開き、問題を解決しなければならなかった。しかし、それを困難と感じたことはないよ。新しいことを学び、挑戦していくことは喜びでしかなかった。

ここを訪れるたくさんの人たちが「あなたがたは、過酷な荒野の中でも不可能はないと教えてくれる」と言ってくることが嬉しいんだ。

——荒野で逞しく生きておられる姿に感動し、カづけられました。この農園と前大統領の故シモン・ペレスが親しい関係にあったと聞きましたが。

私たちのぶどう園に故シモン・ペレス前大統領が来られたことがあった。その時、彼がベングリオンとの思い出を語ってくれた。

ベングリオンは、妻ポーラが亡くなった時、深い悲しみにあっただが、



シモン・ペレスと話すエヤルさん

シモン・ペレスが気分転換させようと「ワインでも飲もう」と彼を誘ったそうなんだ。しかし二人がその時に飲んだワインは、とてもおいしいと言えるものではなかった。そのワインを見てベングリオンに、あるビジョンが湧いてきた。

それは、ネゲブでぶどうを育て、かつてのナバテヤ人が作ったおいしいワインをもう一度よみがえらせることだった。だから、私たちがベングリオンの夢の一端をになっっていると思うと胸が熱くなるんだ！

——この開拓者精神を日本の若者に伝えたいです。一言メッセージを頂けませんか？

開拓者とは、夢を抱き、挑戦を恐れられないこと、困難に背を向けず、妥協しない頑固者であることだ！



現在のぶどう園（2017）

「この農園で働くことで、なぜベングリオンが荒野を見て「イスラエルの未来がここにあり！」と言ったのか分かった気がした。開拓者は、荒野のような何もない所から、何かを見いだし創造する。この精神が約七十年前の何もなかったイスラエルに必要だった。今のイスラエルにとっても荒野は重要な鍵になると思う。この精神を日本人として学べたことが感謝だった。

聞き手：八木 望（エシシヤウ）